

〈書評〉佐藤一子『イタリア学習社会の歴史像：社会連帯にねざす生涯学習の協働』，東京大学出版会，2010年

TSUTSUI, Miki / 筒井, 美紀

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

247

(終了ページ / End Page)

251

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007382>

〈書評〉

佐藤一子『イタリア学習社会の歴史像—社会連帯にねざす生涯学習の協働—』、東京大学出版会、2010年

法政大学キャリアデザイン学部准教授 筒井 美紀

イタリアでは、成人教育はいかなる過程を経て今日の姿かたち、そして課題へと至っているのか。成人教育には、組織化へのどのような社会的要請があり、政策・制度がとられ、また、学習機会の提供と担い手はどうなってきたのか。本書は、比較成人教育史研究の立ち位置から、「歴史学や社会思想史研究などでは十分対象化されていない、イタリアの一般市民や青年たちの知的文化的営みを明らかにし、社会の底辺から学びを組織してきたイタリア学習社会の発展をあとづける」(p. iii)ものである。19世紀中葉から00年代まで、150年超の外国の歴史をたどる作業は、気が遠くなるほど困難な、頭脳と身体の「労働 lavoro」である。先行研究の成果の摂取に加えて、約30年にわたる現地でのヒアリング調査、さまざまな政策資料・活動報告等の収集——たゆまぬ「生涯学習」ならぬ「生涯研究」が本書へと結実したことに脱帽する。

イタリア成人教育に関しては、「日本ではまとまった通史が書かれておらず」(p. 392)、教育研究者にとっても馴染みが薄い。評者にはこれが見事に当てはまる。イタリアの歴史・社会・教育といえば、名著『柔らかないファシズム』を大昔に読んで残っている断片的な戦前戦中期の知識、その後はほぼ空白で1970・90年代にとぶ。高齢化の進展が極めて早く、青年の離家が大変に遅いこと、EU内でのキャッチアップが急務なこと、そして自発的結社 association の伝統が支える市民性 (Putnam, 1993)、くらいである。それゆえ本書を読むことは、不勉強な人間が、まずは通史的に像を結ぶプロセスであった。教育社会学・労働社会学を専攻し、近年は日米の自治体・NPO・中小企業アソシ

248 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

エーションの労働力開発に関する調査研究に四苦八苦している評者が、著者の呈する「ひとつの歴史像」(p. 26)をどのように読み取り、そこから何を喚起されたか。以下に述べていきたい。

本書は、「イタリアでは民衆教育、成人教育、生涯学習の三つの概念が時代を経ながら通用してきた」ことを踏まえ、成人教育の組織化過程を大きく三期に区分する (p. i, 18)。第一期は、民衆教育、民衆文化と総称される活動が社会的に叢生し、成人教育の土壌を形成する段階である (第Ⅰ章の戦前期、第Ⅱ章の戦後から1960年代まで)。第二期は、北部の労働運動を通じて提起された学習権運動を機に、労働者・成人の低学歴構造が社会問題化し、成人教育政策が確立されていく段階であり、1970年代前半をピークとして1960年代後半から1980年代にかけての時期がこれにあたる (第Ⅱ章の後半から第Ⅲ章を中心に、第Ⅳ章及び第Ⅴ章の一部)。第三期は、生涯学習の政策化、EU 統合の国際的なインパクトを受けながら、人材育成が重視された現代的な学習社会を構築する1980年代以降の段階である (第Ⅳ章、第Ⅴ章の一部と第Ⅵ章)。

なぜ・どのように、民衆教育→成人教育→生涯学習という概念変化が生じてきたか。その背後にある社会的な構造変化が、「アソチアツィオニズモ」とのダイナミズムとあわせて明らかにされていく。アソチアツィオニズモとは、「市民社会の自由な結社が相互に連合し、政治的社会的な活動を発展させる担い手となるという理念と実態 (p. ii)」を意味し、戦前戦後の「国民統合への国家的関心に先駆けて」(p. 20)発展してきたものである。これを「官対民」のようなお決まりの構図として捉えてはならない。第Ⅳ章、第Ⅴ章が明らかにするように、アソチアツィオニズモ自体が発展を遂げ、地方自治体と協働する仕組みへと変容していくのだ。トスカーナ州における「学習サークル」政策、エミリア・ロマーニャ州における成人職業訓練と学校職業教育の統合システム構築の経緯について読むと、「補完性原理」がタテマエに始終せず実質化するには、社会連帯的な生活文化の成熟 (それには長い時間がかかるのだ) が不可欠であることに、あらためて気づかされる。

400頁を越す大著の概略を、わずか24行で述べるのは誠に不本意なのだが、詳しく書き始めるとこの紙幅ではとても足りない。ディテールと大きな歴史の流れのバランスが絶妙で、「なるほど…!」と考えさせられる箇所に満ちてい

佐藤一子『イタリア学習社会の歴史像—社会連帯にねざす生涯学習の協働—』、東京大学出版会、2010年 249

るからだ。そもそも書評はざっくりと要約を書かざるを得ず、「ディテールの喜び」を潰してしまう。それゆえ、とにかく御一読いただきたい。評者はマーカーペンを2本使い切った。

さて、本書を通読して知覚されたのは、第V章・VI章とそれまでの諸章とでは、テンポが大いに異なることだ。この相違は、1993年 EU 統合後の欧州経済社会に歩調を合わせるべく、イタリアが如何にハイペースで、労働市場指向の「学習社会」の組織化に取り組まざるを得なかったかを反映している。新たな法制化、新たな組織化、新たな実験…同じ10年でも、出来事の頻度はかつてよりずっと過密で、またその情報量も断然に違う（夥しい政策資料・活動報告書!）。したがって、ずっと多くの紙幅を概略的記述に割く必要がある。だが、政策資料・活動報告書には、書かれていないこと・書けないことがたくさんある。そこに切り込むのは問いであり、それに答えるには分析概念が必要である（本書が基づいた文献資料自体、歴史を遡った方が、「実証主義と観念論をめぐる揺れ動き」「同意の組織化」といった分析概念をより多く駆使しており、第IV章まではそれが込みになっている箇所が多い）。第V章・VI章が扱う1990年代以降に関しては、次のような問いが発されてよい：さまざまな組織体が「連携」する際、合意に至らないのは何に関してなのか。

行政・労働界・経済界・市民諸団体は相互に対等な社会的パートナーであり、合意の積み重ねが大切だ、という合意があるのだとしても、アソチアツィオニズモを基盤とする協働の発展過程があるとしても、そこに葛藤 conflicts が無いことにはもちろんならない。1990年代以降のそれはどのようなものか。

こうした葛藤の根幹には労働の変容がある、と評者は思考する。それを要素に分ければ差し当たり、①総労働時間、②労働の質、③労働組合の機能・意義、となる。①③に関して言えばそれは、＜現職労働者の安心・保障／産業の革新・成長／不安定就労の社会的弱者の安心・保障＞のトリレンマを生んでいる。不安定就労の社会的弱者からすれば、現職労働者の労働条件・社会保障をがっちり守る労組よりは、革新・成長のために労働条件・社会保障のレベルを下げようとする雇用主の方が魅力的に映りかねない。この矛盾を前に、「アソチアツィオニズモ」はどう具現しているのか。それが社会的協同組合をはじめとして、地域の生活や文化に根ざした活動を展開していること、そうした社会

的な過程が「教育制度を補完するだけでなく、制度と協働し、教育システムを創造するダイナミズムを伴った」(p. iii) ののだという点は、大変よく分かる。では、同様に「制度」である労働組合とは、いかなる相互作用がなされてきたのか。

所与の社会の労働力人口と市場の論理が決定する雇用量との乖離が大きくなった現代と比べれば、多くの労働者を長時間働かせることが富の源泉であった前期近代においては、労働組合は団結しやすく、他団体とも連携しやすかった。単純化を恐れずに言えば、「長時間労働のせいで余暇・文化活動・学習の時間がない」と主張すればよかったのだ。だが、構造的に不安定就労を強いられる人口がここまで激増（総労働時間が激減）すると、そうはいくまい。「150時間コース」が目標とした「自分の生活と労働の個人的な体験を、歴史総体の枠組みの中で、批判的に理解する」(p. 180) を人びとが実践すれば、上記のトリレンマに行き着く。それを真正面から解決しようというよりはむしろ、「オルタナティブ」戦略がイタリアでは展開されている、という理解でよいのだろうか。

②労働の質、について言えば、「知識基盤社会」「エンプロイアビリティ」に対し、人びとがどう批判的である（ない）のかが、いまひとつ不明瞭であった。これらのイデオロギーの厄介さにどう取り組んでいるのか。それは単に、「社会的排除が生じないよう、みんなで協力している」というレベルの話ではない。「労働者が組み込まれている生産過程に固有の、職業技術知識の習得に限定されない学習」(p. 163) と、かつては比較的容易にできた境界画定が、「生産過程に固有」なるものが人格や生きること自体にも深く入り込んできた（その総体としての「エンプロイアビリティ」、それを肝心だとする「知識基盤社会」!）ために曖昧化しているという厄介さに、どう対峙しているのだろうか。

まとめれば、労働の変容にふみこんだ葛藤論的視角は、上述のような別の像を浮かび上がらせるだろう、ということである。その像が表象するのは、解決には程遠い膠着状態に他ならない。それゆえに、諸々の社会的パートナーが合意できるのは、連携が大切だという手続き論と、「学習社会」の構築という未来の（「未来」はエンドレスである）目標なのではないか。評者は、「グローバル社会のなかで、すべての人々が継続的に学ぶ機会を保障されること、社会に

佐藤一子『イタリア学習社会の歴史像—社会連帯にねざす生涯学習の協働—』、東京大学出版会、2010年 251

における生涯学習の意義はますます大きくなっている」(p. 399) という結びのことばに賛同する。「イタリアの人々の生活、特に青年たちの労働と生活は新たな困難が増大している」(p. 399) ことを、生涯学習は解決するのか? のような、野暮な反語的質問を発するつもりはない。なぜなら、ロレンツェットが言うとおり、「教育は、問題を解決するものではない。自分自身で、あるいは他者のために問題を解決しようとするような人間を形成することが教育」(p. 116) だからである。教育・学習は、事後的にのみ identify が可能な、未来への投企・投資なのだ。しかしだからこそ、「学習社会」で、人びとは合意できる——これが「同意の組織化」ではないと言い切るには、社会は何を備えているべきか。

以上である。無い物ねだりめいたかもしれない。恐らくこれらの点は、終章が挙げる課題の1つ「リスボン戦略10年の検証」(p. 398) に今後取り組まれるであろう著者の、次なる研究成果で展開されよう（これは評者の願望である…）。社会教育学の「理論家」を全面的に出した、EU 統合後のイタリア学習社会の分析が待ち遠しい。

最後に、法政大学キャリアデザイン学部と関連することを述べておく。著者は、2011年度開始の学部資格「地域学習支援士」設置に、中心的役割を果たしてきた。2010年4月に着任したばかりで経緯を知らぬ評者には、この資格の趣旨と、著者がそこに込めた思いが、本書から深く伝わってきた。相も変らぬタテ割り行政や地域主権化の停滞が続き、学校教育、成人教育、職業能力開発などがタコツボ的に広がったままの日本。グラムシの概念をもじれば、「みずから教育しない組織されない社会」とでも言うべき状況での、ひとつの実践現場に発する学びの組織化が、本資格なのである。